



其草稿を以て河津師曰昔もあつてあつて
子然同費然いふて道通の義子とて救ふ
と、群談採録よりいふ、并ういふ也、
費、彪為、新島、長、小、民、貧、困、多、不、養、子、彪
歳、為、其、制、と、教、入、同、眾、數、年、由、人、長、子
者、以、千、數、曰、此、實、又、所、生、也、皆、衣、為、實
又、東、坡、曰、鄧、岳、曰、野、山、人、例、以、二、男
一、女、過、此、別、殺、之、云、云、是、も、ま、の、制、に、教、は
あり、文、を、た、し、畧、之、官、人、を、殺、戮、ふ、も、む、に
政、り、毎、日、一、し、と、い、ふ、事、も、あ、り、唐、人
の、て、金、を、捨、て、捨、つ、事、も、あ、り、中、原、の、地
も、是、も、同、徳、信、よ、う、と、い、ふ、事、も、あ、り、
子、然、同、費、然、い、ふ、事、も、あ、り、

是を貧人の所為より、民、貧、困、の、み、り、と、
か、れ、の、地、に、い、ふ、道、を、一、頭、と、い、ふ、

青井一玄溪

青井一玄溪、其、本、多、矣、政、利、不、仕、其、困、窮、一、て
處、を、か、れ、の、後、玄、溪、系、師、と、い、は、る、と、業、を、す、
元、禄、十、二、庚、辰、集、始、て、漢、書、を、書、經、小、治、の、道、以、
て、江戸、を、行、り、明、年、其、處、を、長、民、の、傷、と、い、て、
自、畫、於、湯、の、園、治、を、す、る、日、亂、を、い、ふ、赤、穂、の、
道、を、通、り、系、師、の、墓、を、見、る、日、義、舉、の、事、を、説、く、
及、び、て、諸、事、を、俱、く、考、畫、あ、ら、う、と、い、ふ、事、も、あ、り、
小、東、の、世、を、考、へ、る、事、も、あ、り、長、旅、の、事、も、あ、り、
八月、の、日、を、考、へ、る、事、も、あ、り、是、の、定、親、圃、の、復、讐、録、と、い、ふ、

その山傳の氏年生にありしは夫婦に二人の弟をせ
し金時慶喜のいづれか入るる遊樂の事ありしに
救者あるが中、すし一ははるまじり

その人の墓を清一に尋ねしに、和按、此七人の秀和を
母の事とす、其母の事

その山傳の事、其母の事

その山傳の事

其母の事、其母の事

其母の事、其母の事

其母の事、其母の事

其母の事、其母の事

一、凡欲求道者，必先正心。心不正，則身不正，身不正，則事不成。故曰：心者，身之主也。事之統也。心苟正，則身自正，身自正，則事自成。此之謂道也。

二、其次，則在誠意。誠意者，心之誠也。心誠則意誠，意誠則身修，身修則道成。故曰：誠者，天之道也。思誠者，人之道也。至誠而不動者，天下之歸也。

三、其次，則在致知。致知者，心之明也。心明則知至，知至則德厚，德厚則道尊。故曰：致知，則知天。知天，則天降大任於斯人。

四、其次，則在格物。格物者，心之達也。心達則物格，物格則事舉，事舉則道明。故曰：格物，則事舉。事舉，則道明。

五、其次，則在修德。修德者，心之積也。心積則德厚，德厚則道尊。故曰：修德，則道尊。道尊，則天下歸之。

六、其次，則在立身。立身者，心之立也。心立則身正，身正則道成。故曰：立身，則道成。道成，則天下歸之。

七、其次，則在行善。行善者，心之行也。心行則善積，善積則德厚，德厚則道尊。故曰：行善，則德厚。德厚，則道尊。

八、其次，則在去惡。去惡者，心之去也。心去則惡除，惡除則身正，身正則道成。故曰：去惡，則身正。身正，則道成。

九、其次，則在守中。守中者，心之守也。心守則中，中則和，和則平，平則道成。故曰：守中，則和。和，則平。平，則道成。

十、其次，則在克己。克己者，心之克也。心克則己私去，己私去則心正，心正則道成。故曰：克己，則心正。心正，則道成。

一、凡欲求道者，必先正心。心不正，則身不正，身不正，則事不成。故曰：心者，身之主也。事之統也。心苟正，則身自正，身自正，則事自成。此之謂道也。

二、其次，則在誠意。誠意者，心之誠也。心誠則意誠，意誠則身修，身修則道成。故曰：誠者，天之道也。思誠者，人之道也。至誠而不動者，天下之歸也。

三、其次，則在致知。致知者，心之明也。心明則知至，知至則德厚，德厚則道尊。故曰：致知，則知天。知天，則天降大任於斯人。

四、其次，則在格物。格物者，心之達也。心達則物格，物格則事舉，事舉則道明。故曰：格物，則事舉。事舉，則道明。

五、其次，則在修德。修德者，心之積也。心積則德厚，德厚則道尊。故曰：修德，則道尊。道尊，則天下歸之。

六、其次，則在立身。立身者，心之立也。心立則身正，身正則道成。故曰：立身，則道成。道成，則天下歸之。

七、其次，則在行善。行善者，心之行也。心行則善積，善積則德厚，德厚則道尊。故曰：行善，則德厚。德厚，則道尊。

八、其次，則在去惡。去惡者，心之去也。心去則惡除，惡除則身正，身正則道成。故曰：去惡，則身正。身正，則道成。

九、其次，則在守中。守中者，心之守也。心守則中，中則和，和則平，平則道成。故曰：守中，則和。和，則平。平，則道成。

十、其次，則在克己。克己者，心之克也。心克則己私去，己私去則心正，心正則道成。故曰：克己，則心正。心正，則道成。

ちーがふららるるふゆつたあつたつた
しーるるるるるるるるるるるるるるる
地ゆるるるるるるるるるるるるるるる
張ゆるるるるるるるるるるるるるるる
と擡さかるるるるるるるるるるるるるるる
しゆるるるるるるるるるるるるるるる
おるるるるるるるるるるるるるるるる
かごるるるるるるるるるるるるるるる
しーゆるるるるるるるるるるるるるるる
ちゆるるるるるるるるるるるるるるる

石野権多清
市多清

石野権多清、市多清、足利の京師、四條坊の西側
次の本、核校也。いり南家、足利とて、
と、堀川の流を慕ふ、と足利とて、佛を
し、之端、小通、市多清、足利、又、
鏡樂、成、心、いり、市多清、足利、
書、本、あ、る、あ、る、い、り、市多清、
ゆ、り、久、し、一、回、集、り、市多清、
て、ゆ、り、市多清、足利、い、り、市多清、
り、り、市多清、足利、い、り、市多清、
あ、る、あ、る、あ、る、い、り、市多清、
山、下、懐、ふ、小、清、も、真、供、下、花、あ、る、
し、り、あ、る、あ、る、あ、る、い、り、市多清、

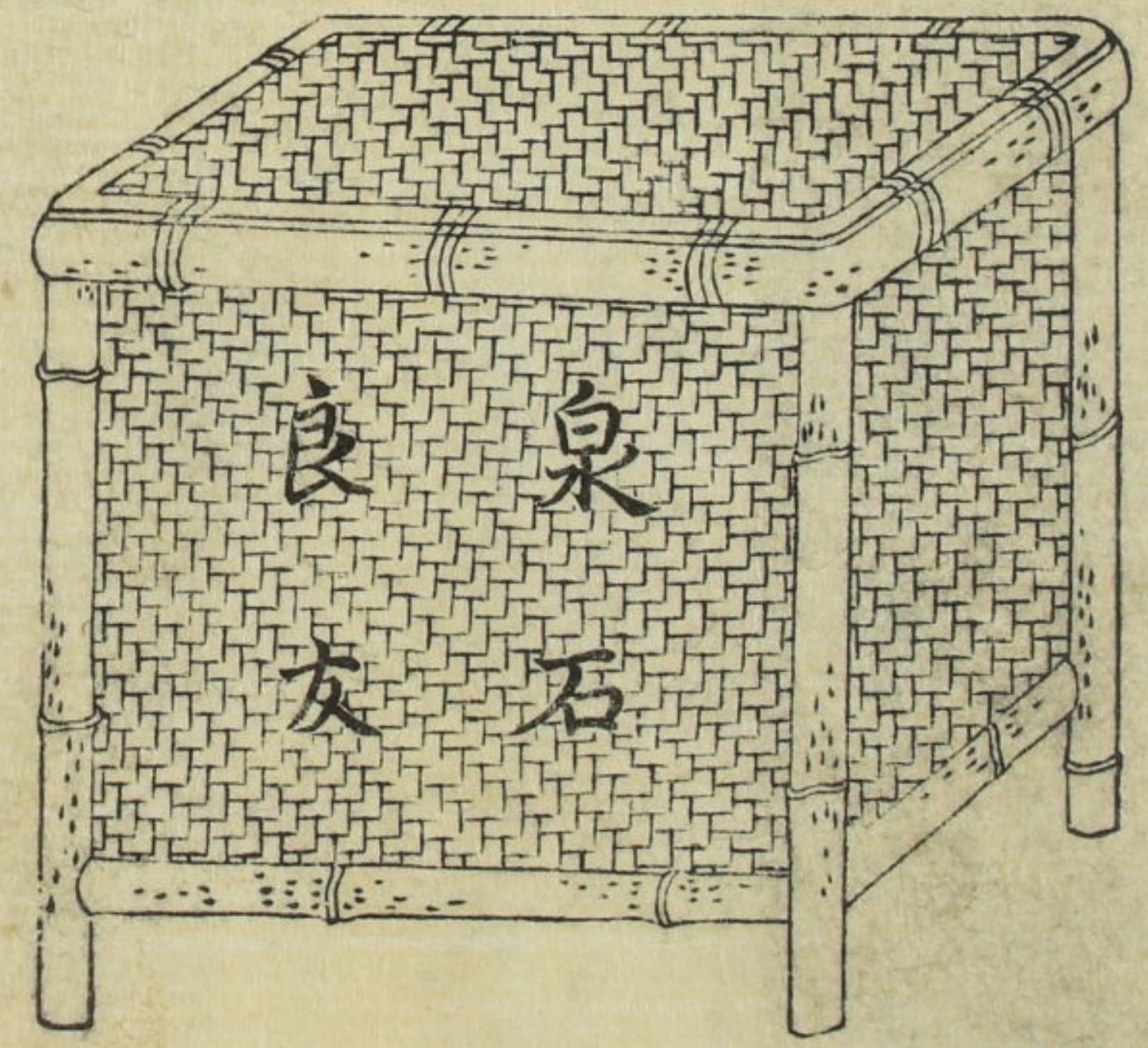
此の如く言ふ所の言は曰く、世奇首を竟つて
 座成辭して、是れ於金井の邸を刺つて、
 駿もりのたぐも、晴もりのち、
 居て自煉ん、
 覺じり、
 ばりぞ、
 ずして、
 と稱せんは、
 此の十四年、
 命れ、
 て人の、

此の如く言ふ所の言は曰く、世奇首を竟つて
 は花より、
 て、
 此の如く言ふ所の言は曰く、世奇首を竟つて
 其の如く言ふ所の言は曰く、世奇首を竟つて
 けり、
 運り、
 下は、
 あり、
 自、

蕭陵堂所藏賣茶翁茶具圖八品

都籃

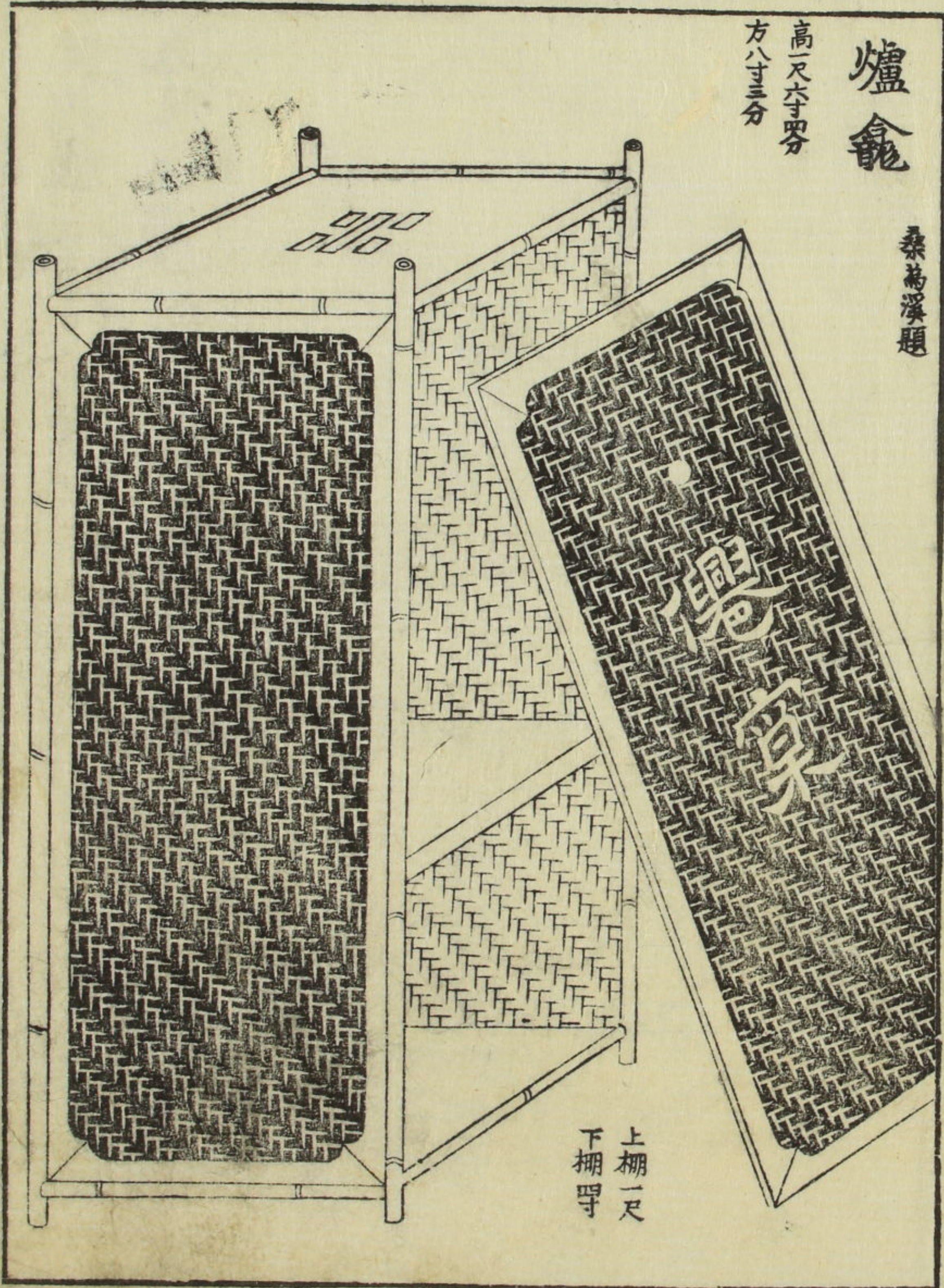
百拙題
高一尺二寸五分
橫一尺



爐龕

高一尺六寸四分
方八寸三分

桑為溪題



上棚一尺
下棚一尺

黃銅爐

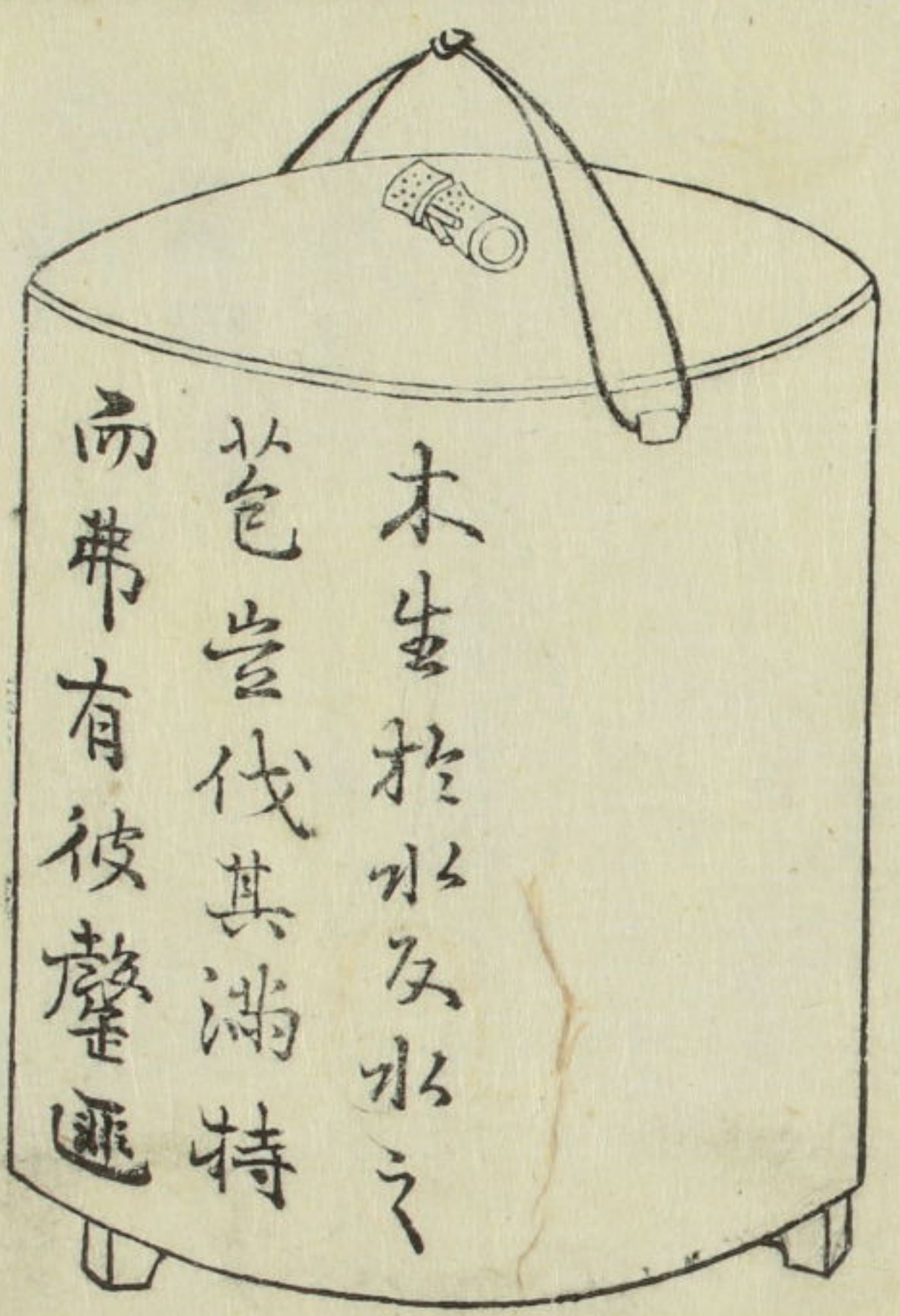
古製加長造
高四寸 徑六寸四分
足徑四寸二分

急燒
唐山製



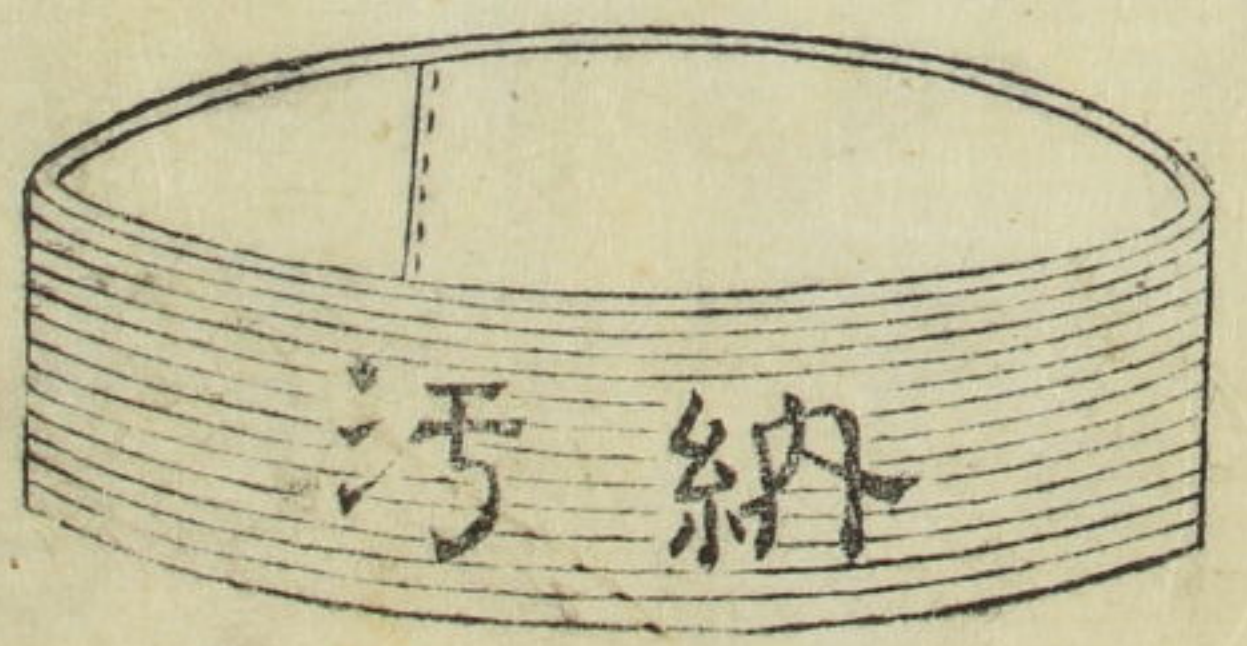
注子

宇士新銘
高五寸五分 徑四寸



建水

終南銘
高五寸五分半 徑四寸



二〇

二〇

瓢杓 竹柄 長寸
芙蓉書



吹管 長八寸二分
蕉中題

大其小頭其微汝其勇於
為者耶 東湖散人題

思孝曰翁肖像見翁偈語故不贅今吾國茶具者其燒心之餘
且最摸造俱藏浪華木世肅之家云

自贊三首

此遠晴漢漫打風顛
早歲入釋常呼冬禪
百城烟水遠探要津
熱喝痛棒掌黃喚
寒歷盡雪霜自披不
顛預面皮憔悴多少
老來為賣菜氣
疎博飯樂在其中
黃通天洞鬻渡
月花若人端味
蒼口強過周憶昔
年之大傳依然
多古少知青鬢
頰照雪疎髮
拳躬瘦杖扶老
鶴鬻藏容具
益為去猶步
此亦賣菜生計
足養衰躬
非儒非釋
又非道一箇
風顛瞎亮蒜箇
賣菜漢籃裡
維何無底
梳子鞏縣
菜籠為糊一
賣菜諸方用力
是大得錢
却做箇擔板
自贊偈

詩人傳二

二十八

夢幻生滅夢幻殆了知幻化絕親疎貪榮為乘猶無足
退步一瓢還存餘無事正頓悟自寂無事上境都
如身儕為得體斯意廓為胸襟同太虛

偶成 覺少年解流
餘業事

太傅面紫難却步十年為業案來新晚雖無力全技
起漫叫黃葉莫失真

仙窠燒却語 仙窠是與藍
不以紫為業也

我從來孤貧每地每難出佐輔空嘗有年亦伴春山
秋水出瀾松下竹陰以故敏於無缺保得八十餘歲今
已老邁無力干用出小斗藏身將終天年却後處薄世
倍之平於出恐有迷恨是以賞出以火既三昧直下向
火焰裏轉身去轉身一向且如何良久云却火個無毫

未盡青山依舊白雲中便付丙丁

乙亥九月初四 八十一歲高遊外

江村專齋 附別齋

專齋江村氏諱宗具倚松庵也年七十有八其居
古寺指餘椽ありける故より祖業基ハ傳承之石
乃城よりして落城の後宗より宗具より傳承之新
互家より傳承之既立之如歌連平とぬむ
了聞善の伎よりあり宗具ゆき宗具より傳承之
かひて宗具より傳承之加藤肥後侯傳承之
森友作傳承之傳承之身より傳承之壽百有と
五より傳承之

後水尾上皇仙洞よりして傳承之

たより山志の儒服儒巾法制をりて得るを以て
名しるふ止るは成りては是とて之を院中小書と傳へ疾
病ありし時に勤解由小法度として人をして中山より
浙視とてしりしは徳士の如自とせ小稱より自ら前
書書懐の詩書堂の人彼を録より得るをといふ事
是年とてんふは是なり

少小涉經史性氣聰詞章宿儒時濟々
是是文人竹世年所畏敬此日皆既亡
後生何寂美聖學將榛荒長安幾新戶
無人代商量所好與世乖為愚又乃和
遭遇子古少無悔特何傷幸也斗斗繁

從意自徜徉請託絕權勢拜謁也羽室
丹花厲我去吟喙習為常又至沈痾患
正古從望法眼精耐誦讀足力涉洵固
車馬不須駕冠蓋何假張生理又略足
不用求望々寒暑給裘葛朝晡有糟糠
回首下世衰比屋屬低昂吾不足衰廢
未嘗有殷周悲貧兒女德豈入文吏腸
梅蘂歎雪文柳條傳春光一窠此表盡
依為迎新陽



西生永濟

漢源生郡中乃里の居士永濟ハ西生と号す
 又河波与兼名といふハ法久と家ハ法久と兼
 生ハ庄と領一莊内務卿師といふハ又法久と兼
 中ハ源生知開の息也相承る乞養呪ふある
 一ハ息也兼名也物々我我と云々法久不知開永
 濟と杖打と云々一ハ法久と兼名也一ハ法久と兼
 兼名ハ源生と云々一ハ法久と兼名也一ハ法久と兼
 人又補さる一ハ法久と兼名也一ハ法久と兼名也
 一ハ法久と兼名也一ハ法久と兼名也一ハ法久と兼
 一ハ法久と兼名也一ハ法久と兼名也一ハ法久と兼
 才人として山村孝次は中ノ著せる和漢胡歌集ハ

西生永濟

三十一

○忠直志摩よりつづるに一五年のころに某
 年中一奇人ありて人跡絶るるありて名を
 年々先づかきつゝのりて其後一はるるに
 ありて谷川の水をく櫛流す時を金魚と名づ
 道法絶るんと時色をくふくはるるに
 我命ある路をなきに一合あるる我命の流るる
 ときをくはるるに其の流るるに
 忠直と名づるに其の流るるに
 くはるるに其の流るるに
 花頼切ておらるるに其の流るるに

崎人傳卷之三終

